

## キーワード集

### דיבוק

ユダヤの民間伝承において、人間の肉体や魂に憑依して暴れると信じられた悪霊のこと（ヘブライ語の「憑りつく」(davok) という動詞に由来）。ディブツクの伝承は、ユダヤ教神秘主義カバラの著作に記述された「ギルグル」（「輪廻」ないし「転生」の意）と呼ばれる観念に由来する。カバリストのサークルでは、特定のカバリストの魂に彼が精神的導師と仰ぐ故人の魂が憑依するという「魂の受胎」説が受容されてきたが、ディブツクはいわばその逸脱した形態であり、天寿を全うせずに亡くなり、地上で犯した罪が浄化されないまま地上を彷徨っていた魂が生者の肉体に憑依すると信じられた。ディブツク伝説の多くに共通するのは、適齢期のユダヤ人女性が男性の悪霊に取り憑かれて暴れ出したのを機に、カバラの秘儀に通暁したラビが悪霊を祓い除け、女性を救出するというモチーフである。

### קבלה

「伝承」を意味するユダヤ教神秘主義の思想と実践の体系。世界の創造を、無現なる神性エイン・ソフから聖性が10段階にわたって流出する過程と捉え、その聖性の最終的な形がこの物質世界であると解釈する。この過程は、10個の「球（セフィラ）」と22本の「小径」から構成された「生命の樹」と呼ばれる象徴図で示され、各球に神の属性が宿るとされる。その理論は16世紀のパレスチナに生きたカバリスト、イサク・ルリアが「収縮」「器の破壊」「修復」の三段階から成る壮大な宇宙論として発展させ、とりわけユダヤ教敬虔派ハシディズムに受け継がれた。

### 「収縮」(צמצום)、「器の破壊」(הכלים שבירת)、「修復」(תיקון)

「無限なる神性エイン・ソフは、すべてに偏満し、被造物が創造される時空間は存在しなかった。そこで、神性は自身へと自己収縮し、創造のための空間を造る。ここに神の意志である光が照射され、神性が段階的に流出して、巨大な原人アダム・カドモンが形成されていくが、この創造の光を盛る器は耐えかねて破裂し、光は天上界へ戻ってしまう。しかし破片に取り残された光の火花は、破片とともに落下して、別の世界、悪の世界を生み出す。そこへ絶えず、神の光線が照射されて、囚われの火花を救出し、創造の完成をめざそうとする。囚われの火花は、ユダヤ人の体内にも入った。ここにユダヤ人は、自らの魂を浄化することで、火花を天の世界へ回復させる責務が課せられたのである。」(市川裕『ユダヤ教の歴史』[山川出版社、2009年]、104頁)

### חסידות

ルリア・カバラの影響を受けて、18世紀中葉に現在のウクライナで誕生したユダヤ教の刷新運動。「敬虔なる者」という意味の「ハシッド」に由来。遍歴の札売りで奇跡使いと信じられた「善き神名の主（バアル・シェム・トヴ）」ことイスラエル・ベン＝エリエゼル（1700-1760）によって創始され、タルムードの学習に偏重したラビ・ユダヤ教のエリート主義を批判し、無学な者も、真心からの祈り、歌、踊り、食事、歩行といった日常的な所作を通じて神に近づくことができるという教えがユダヤ人大衆層に支持された。義人（ツァディク）と呼ばれるカリスマ的な導師たちを中心に東欧一帯に広がった後、近代化の波や度重なる戦乱によって一時的に衰退したものの、その独特の教えは、マルティン・ブーバー、フランツ・カフカ、エリ・ヴィーゼルらの著作を通してユダヤ人社会を越えて影響を与え続けている。

### צדיק

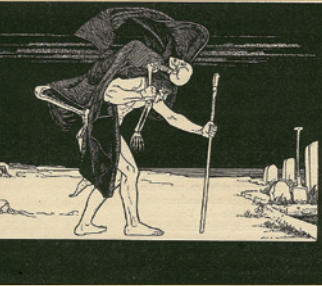
元来は、『旧約聖書』のノアやヨセフのような神と人の前で義しい行いをしたとされる特別な人物のことを指す。東欧ユダヤ社会の文脈では、ハシディズムの開祖バアル・シェム・トヴの直系の末裔か弟子の系譜に連なるカリスマ的導師のことを指す。神と人との間を仲介する人物とされ、しばしば奇跡を行う神通力の持ち主と信じられた。律法学者であるラビと区別して「レベ」という呼称で親しまれ、「善きユダヤ人」とも呼ばれる。

### כליזמר

ヘブライ語で「楽器」の意。東欧・ロシアを中心とするアシュケナージ・ユダヤ人社会において、結婚式をはじめとする祝祭の際に演奏された音楽ないしその演奏家のこと。古来より伝わるヘブライ語の祈祷の旋律の要素に加えて、ルーマニアをはじめとする東欧一帯の民俗音楽の諸要素が混ぜ合わさったような音楽。クラリネットやフィドルを中心とする少人数編成で演奏されることが多く、1970年代頃を境に欧米などで再評価が進んだ。

### ניגון

ハシディズムではことに音楽が尊ばれ、神への専心を目的として、安息日などの祝祭の度に、レベを囲んだ宴（ティッシュ）や日々の祈祷の合間などに、各流派に伝わる特別な旋律が歌われる。そうした旋律の多くはレベ自身によって作曲され、異教徒の羊飼いやなどがロザさむ歌の旋律から借用されるケースも珍しくなかったと言われる。ニグンの多くには歌詞がないが、詩編などからとられた短い歌詞つきのものもある。



エフライム・モシェ・リリエン作  
『ディブツク』(1908)



カバラの「生命の樹」



実践カバラの手引書『天使ラジエルの書』



マルク・シャガール作『フィドル奏者』(1912-1913)

主催：文部科学省 科学研究費・基盤研究(B)

『ユダヤ自治』再考——アシュケナージ文化圏の自律的特性に関する学際的研究』

共催：大阪大学文学研究科MCE研究会、神戸ユダヤ文化研究会

協力：未知谷、成瀬大雄

ポーランド文学古典叢書 第5巻

『ディブツク／イヴォナ』(未知谷)

## 刊行記念企画

# 二つの世界のはざまで

S・アン＝スキ『ディブツク』とユダヤ文化ルネサンス

ש. אנ-סקי

צווישן צוויי וועלטן (דער דיבוק)

1日目  
10月2日(金)

16:30 ～ 19:30 (最大延長 20:00 まで)

場所：大阪大学21世紀懐徳堂スタジオ  
(豊中キャンパス)

参加費：無料(どなたでも参加できます。事前申し込み不要)

2日目  
10月3日(土)

1回目：13:00 ～ 15:30

2回目：16:00 ～ 18:30

場所：居留守文庫(大阪阿倍野)

参加費：無料(事前に申し込みが必要です)

定員：各回につき15名程度